

「キリストが形づくられるまで」

2022年9月18日

ガラテヤの信徒への手紙4：8～20

佐々木佐余子

このガラテヤの信徒への手紙は、パウロが第3回目の伝道旅行の際に執筆されました。主イエス・キリストが十字架刑に掛けられた後、大体紀元後、23年から28年後に執筆されたと言われています。パウロは第1回目の伝道旅行でガラテヤ地方を通り、その後第2回目の伝道旅行にもガラテヤを訪れました。ガラテヤ地方にはアンティオキア、リストラ、イコニオン、そしてデルベの町があり、この手紙はそれらの町の教会に宛てられたのです。

パウロはとても悔しかったのです。なぜガラテヤの信者たちが変わってしまったのか。パウロは第1回目の訪問の時バルナバと一緒にでしたが、その時イコニオンで大勢のユダヤ人やギリシャ人が信仰に入りました。(使徒言14章)そして、教会が立てられていったのです。立てられる、といっても建物や会堂が建設されるという意味ではなく、信仰を与えられた人たちが集まって礼拝をしている、そういう霊的な集会のことを指しているのです。エクレシア(ギリシャ語)とも言います。信仰共同体です。その群れがあちこちで成立しており主の日に礼拝を献げていたのです。使徒言行録によると、「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない、と言って信仰に踏みとどまるように励ました」とあります。(同14:22)そのようにして別れたのに何故、イエス・キリストの信仰から離れてしまったのか残念だったのです。

ガラテヤのクリスチャンたちは救われる以前は地元の風習や慣習の中で生活していたのです。その点、日本人のキリスト者と似ています。日本人は神社仏閣に囲まれて生活していますね。すぐ近くに神社がありお寺があります。普段は余り縁がないようだけれど、実は日本人の精神に深く関わっているのです。それは日本の歴史・文化と関連があるからです。ある牧師さんが言われました。「日本で伝道するにはこの日本の文化を知らないと伝道するに難しいです」と。本当にそう思います。日本は紀元前1万2000年前から縄文時代が始まったそうで、こちらに社会の先生がおられるので、あまり詳しく話すとぼろが出るので言いませんが、今までずっと続いているのです。そのような日本ですから神社仏閣の由来を知ると歴史が深まります。そのような国で伝道するには並大抵のことではないような気がします。話は少しづれますが、どうしてこの辺に東門前という地名が付いたのでしょうか。調べたのですが、門前町はお寺や神社の前に発達した町のことを言うらしいのです。この付近には氷川神社があるので、その門前町に東を付けて東門前と地名がつけられたのではないのでしょうか。氷川神社は明治天皇の由緒ある神社ということです。そのような地域で伝道しているのですね。伊勢神宮の前に教会があるのです。日本基督教団の山田教会です。天下の伊勢神宮の前になぜキリスト教会があるのでしょうか。少し調べてみたらこのようでした。この山田教会は伊勢神宮の代々の神官を出している家柄の中須治胤なかすはるたねという人がキリスト者になり、

1897年に伝道を始めた教会だということです。土地柄、様々な困難があったそうです。信徒たちは屋根の上に十字架を立てたいと思っていただけ、当時の世相で出来なかったそうです。でも丸い軒瓦の一つ一つに祈りを込めて十字を焼き付けて信仰の証をしたということです。そういえば、七里教会の赤い屋根の上には高々と十字架が立てられています。この辺はそういう迫害はなかったでしょうけれど、十字架一つ立てるにも大変な時期時代があったのです。山田教会125年の歴史を刻んでいます。この付近は門前町でうどん屋があったりしました。食してみたらとても柔らかかったです。何でもお伊勢参りをした信仰篤い人々のために胃に優しいようにとわざと柔らかくして出しているということです。話を戻しますと、ガラテヤのクリスチャンたちは救われる以前は地元の風習や慣習の中で生活していたのです。8節を読むと、「ところで、あなたがたはかつて、神を知らずに、もともと神でない神々に奴隷として仕えていました」とあります。使徒言行録にありますが、魔術師や占い、何かの迷信を信じていつのまにかはまってしまう。日本での風水や手相、星座の類があります。黄色のお財布を持つとお金がたまるとかいます。金運を呼ぶお財布です。迷信とわかっているけどつい買ってしまふ人もいるかもしれません。9節を読むとパウロの嘆きが伝わります。「しかし、今は神を知っている、いや、むしろ神から知られているのに、なぜ、あの無力で頼りにならない支配する諸霊の下に逆戻りし、もう一度改めて奴隷として仕えようとしているのですか」と尋ねます。イエス・キリストによって、自由にされたのに、偶像礼拝や律法主義におちいり、難行苦行をしたりして自分で自分を救おうとする。そういう虚しい努力をなぜするのか、といふかっているのです。ガラテヤ地方では、異教の祭日があり、新月の祝いがあったのでした。10節に「あなたがたは、いろいろな日、月、時節、年などを守っています」と言っています。せっかく伝道したのにガラテヤの諸教会のクリスチャンたちは前の状態に戻ってしまい、パウロは悔しかったでしょう。けれどパウロは頼んでいます。12節でガラッと変わります。パウロは頭を下げてください。パウロは身を低くしてお願いします。パウロは病弱な身でした。そのようなパウロをガラテヤのクリスチャンたちは厄介者扱いせず受け入れ、キリストの福音を伝える伝道者をまるで、イエス・キリストのごとく接したのでした。14節にこのようにあります。「そして、わたしの身には、あなたがたにとって試練ともなるようなことがあったのに、さげすんだり、忌み嫌ったりせず、かえって、わたしを神の使いであるかのように、受け入れてくれました。」そういうクリスチャンが一体どこへ行ってしまったのでしょうか、とパウロは残念がっているのです。パウロの困惑した様子が伺えます。一時は良い状態だったのにパウロが離れた途端、別の指導者が入り込みキリストと違う福音を説くと、彼らはすぐ心変わりし変貌したのでした。

教会の牧師は大抵教会を変わります。中には生涯その教会に仕える牧師はおられるでしょうが、多くはよその伝道地へ赴くのです。牧師がよその教会に移ってもお互い親交が続けばいいのですが、勿論大抵はそうなりますけども、今回は違うのです。次に来た伝道者が前任者の悪口を言ったとなれば、とても悲しいことですね。以前のあなたたちは、たとえ自分

の目をえぐり出しても、わたしに与えようとしてくれたのに、とパウロは嘆きます。けれどこの原因は、元々はあなたがたを扇動した人たちだとパウロは言い切るので。彼らは律法を信じ込ませ、イエス・キリストの福音の恵みから離そうとしていると言います。ユダヤ人にはあるまいし、異邦人にいまさら律法を教えてどうなるのでしょうかとパウロは思ったのです。17節でパウロは言います。「あの者たちがあなたがたに対して熱心になるのは、善意からではありません。かえって、自分たちに対して熱心にならせようとして、あなたがたを引き離したいのです。」とパウロは見抜きます。

今世間を騒がしている世界平和統一家庭連合(旧統一教会)もそうではないでしょうか。一見教理が聖書とよく似ています。キリスト教をご存じない方は、間違って信じてしまうかもしれません。文鮮明の3番目の奥さんがハン ハクチャ(韓 鶴子)で今の総裁になっています。この方が救世主ということ。文鮮明は2012年に92歳で亡くなっています。政界に深く関わって大きな力を持っています。ある人に聞いた話ですが、質屋の息子は子どもの頃から親から本物しか見せられないのだそうです。宝石なら本物だけ、本物の輝きしか見ない、カバンだったらブランドのカバンだけしか見せない、皮の光沢や手触りを覚えさせる、絵画だったら偽物は見せない、そういう教育をして育てると鑑識眼が養われて、物を鑑定する時、間違わないそうです。たとえお客さんから本物のラベルを見せられても目が鑑識するそうです。このように、ガラテヤのクリスチャンたちはパウロから本物の福音を聞いたのですが、惑わされてしまいました。19節にいけますと、「わたしの子供たち、キリストがあなたがたの内に**形づくられるまで**、わたしは、もう一度あなた方を産もうと苦しんでいます。」ここにパウロの愛が現れます。普通はもう勝手にしなさいよ、と切り離すところでしょうか。それにしてもわたしたちにキリストが根付くまでどんなに時間がかかるのでしょうか。

今朝は敬老祝福の礼拝を守っています。聖書では長寿は神の祝福とされています。聖書以外でもそうですね。私の住む自治会では75歳以上のいわゆる後期高齢者にはプレゼントがあるのです。でも後期高齢者という言い方はあまり良い言い方ではないと思うのです。他にないでしょうか、例えばシルバー世代とか、プラチナ世代とか良いネーミングはないものかと思えますね。今のご老人は昔と違ってだいぶお若いです。服装もセンスがいいし、年を取るといふし銀のような魅力が出てきます。この間亡くなったイギリスのエリザベス女王も本当にびっくりするくらい若々しくはっと目が覚めるようないで立ちです。詩編90篇に「人生の年月は70年ほどのものです。健やかな人が80年を数えても得るところは労苦と災いに過ぎません」とモーセは語っています。ですから皆さん方は大変長寿と言えます。旧約時代はイエス・キリストはまだお生まれになっていないのでモーセは悲観的なことを言っていますが、私たちには主イエス・キリストが与えられています。人生には山あり、川あり、崖ありますが、主を信じる者には闇の人生ではなく、主の光が与えられているのです。なんて人生の先輩方にこんなことは言わなくてもよろしい。皆さん方身をもって体験され

ているのです。ガラテヤのクリスチャンたちは一時パウロの教えを忘れて、違う教えに行ってしまったけれど、後からきつと立ち返ったのでしょう。先輩方はずっとこの道を歩んでこられました。そういう意味で敬服に値します。なぜなら後進の者はいつなんどき、道を踏み外すかわからないのです。キリストが**形作られるまで**神さまは何回も手形を押してくださいます。そして、遂に私たちの中に主イエス・キリストが焼き印を押したかのようにはっきりと跡が付くのです。それがキリストの証明です。これからも神さまから元気を与えられて後進の者を勇気づけ、励ましてくださいますよう、共に信仰の道を歩きたいと思います。